



たぶん、石州街道に詳しい人であれば、須賀神社の代わりに、もっと街道の話題に相応しい対象物を選ぶことだろう。本文に書いたように、この須賀神社には特段興味を引くようなものはないらしく、ガイドの方からのコメントもなかった。しかし、遠目に見ても、どこかいい感じなのである。それで急いで写真を2、3枚撮って、取り敢えずそれをもとにイラストは描いたのだが、色々な資料に当たっても須賀神社に関する特段の記述は出て



**イラストでたどる石州街道** 28 **須賀神社**

あとう観光協会の建物を過ぎ、国道9号線を横切って街道沿いに1号も進むと、右手斜め奥に須賀神社の鳥居が見えてくる。と言っても特段深い由来などなさそうな神社だが、参道から鳥居越しに見る社殿、そしてその周囲を取り巻く情景が何とも感じの良い雰囲気を感じ出していたので採り上げた次第。

阿東郷土史研究会の資料によれば、創建年月不明。明治時代までは「疫神様」と呼ばれていたとあるので、おそらく疫病除けの神様なのだろう。そうだとすれば、数年前のコロナ流行時にはお参りする人も多かったことだろう。また、多くの神社同様、明治期に神仏分離令によって、近郊の神々を合祀して現在の須賀神社に名を改めたとのことである。

文イラスト  
古谷眞之助



こない。あれこれ苦慮していたところ、地元の阿東郷土史研究会の資料に本文の後半部の記述を見つけて何とか原稿を書き上げたようなわけなのである。ともあれ疫病除けの神様として靈験あらたかな神社なのだろう。ということであれば、コロナの蔓延した数年前には(今も相変わらず感染者はでているようだが)徳佐の多くの人がお参りしたか、或いはもう原因が分かっているから、お宮参りよりも医者にかかる方が先といったドライな選択をした人も多くいたことだろう。かく言う私も、神社にお参りするのは正月か旅先で有名な神社を訪ねる時くらいでしかないから、もしヤバそうになれば、迷わずに病院受診を選ぶのは間違いない。

遠い昔、まだ医学も発達していない頃には、医学的には何ら根拠のない民間療法や神頼みが多くあったことだろう。何せ、他に治療方法がないのだから、それはそれで仕方ない。仮にその時代に生まれていれば、自分もそうするだろう。つまり、何度も何度も神様にお参りし、効くと言われることは何でも行ったに違いない。それはむしろ自然なことである。誰もよく分からないことで死にたくはないのだから。そういうことを思うと、医学の発達した現代においても難病は克服できていないし、例えばガンの末期となれば、死の宣告を受け、激しい恐怖と戦わねばならない。精神的にはとても強いとは言い難い自分は、できることならそんな事態は避けたいと思っている。痛みを伴わない安らかな死というのが希望である。そして認知症になってただ生きるというのも、植物人間になって生きるというのも耐えがたい。変な話題の展開になってきたが、私もそういうことも視野に入れておくべき時期に来ていると思いはするのだが、さて。(2024.7.20 記)